

奈良市法華寺南遺跡の復元をめぐる

秋期特別展「ナラから平城へ^な^ら」

ー旧石器からはじまる3万年の歴史ー」から

小原 俊行

企画調整部 研究員

1. はじめに

令和7年度平城宮跡秋期特別展「ナラから平城へー旧石器からはじまる3万年の歴史ー」では、後期旧石器時代から飛鳥時代に至るまでの平城宮周辺地域の歴史を巡るものであるが、その一環で後期旧石器時代前半期の石器群が出土した法華寺南遺跡の復元画を制作することとなった⁽¹⁾。

本稿では、その過程を紹介するとともに、復元画に描かれている要素について解説する。

2. 法華寺南遺跡の概要

法華寺南遺跡は平城宮跡からみて南東側、現在の国道24号線北側に所在する遺跡である(写真1)。平城京内の要地であることから、本遺跡では奈良時代の建物跡の遺構検出面から更に下層の粘土層において、後期旧石器時代の石器が出土している(写真2)。

発掘調査の結果、805点の石器が出土した(写真3)。石器は主に3つのまとまり(石器集中部)をもって出土し、周囲には焚火をした痕跡の一部と思われる炭化物も出土している。石器には槍先等の狩猟具と推定される尖頭形石器⁽²⁾のほか、穿孔具として使われたと思われる^{いしきり}石錐、皮革加工具である^{そうき}搔器、これらの道具を作る過程で生じた剥片や碎片などがある。

法華寺南遺跡の最大の特徴は、接合資料にある。出土した石器同士を接合させることで、旧石器時代の人たちが、どのような状態で石材を遺跡内に持ち込んで消費したのか、その過程を追究することが可能である。接合資料

を分析した結果、二上山産サヌカイトの原石を運搬可能な大きさに事前に加工した状態遺跡に搬入したこと、それを素材として更に打ち割って長さ2～5cm程度の小形石刃を生産していたこと、そして、小形石刃を整形して尖頭形石器等の各種石器を製作していることが判明した。

また、石器が出土した層の直上からは、始良Tn火山灰(AT)と呼ばれるテフラが発見された。ATは鹿児島県にある始良カルデラが形成されたときの大噴火によって噴出したもので、日本列島各地や朝鮮半島の一部にまで降下している。放射性炭素年代測定等の分析によってAT降下は今から約3万年前であることが判明しているため、法華寺南遺跡の石器は少なくとも3万年より前の所産であるといえる。

3. 法華寺南遺跡での居住形態

旧石器時代の人類は周期的な移動を繰り返す遊動型狩猟採集民であったと想定されている。季節的な集落も形成していたと考えられるが、国内では住居跡の遺構が検出された事例は神奈川県田名向原遺跡等の僅かな事例を除いてほとんど検出されていない。

狩猟採集民の居住形態に関わるモデルではL.R.ビンフォードのコレクター・フォーレジャーのモデルが有名である。ビンフォードは世界各地の民族誌を基にして、拠点居住を頻繁に移動させるフォーレジャーと、フォーレジャーよりも相対的に定住度が高く、資源獲得の際には少人数のタスク・グループを派遣



写真1 法華寺南遺跡の発掘調査全景



写真2 法華寺南遺跡の発掘調査



写真3 法華寺南遺跡出土石器

するコレクターとに区分している。

フォーレジャーは資源が均等に分布する環境下において主に採用される形態で、資源付近に居住地を設営すると共に、利用可能な資

源が減少した場合に居住地ごと移動させる。資源は均等に分布することから、貯蔵等による将来的な備蓄や道具の管理化は少ない。

これに対し、コレクターは資源が不均等に



写真4 復元画作成の様子



写真5 二上山と二上山産サヌカイト原石

分布するか変動の大きい環境下で採用される。この場合、特定資源の近くに拠点を設けると他の資源が獲得できないことから、資源の獲得の際には少数の集団がタスク・グループとして派遣される。また、将来的な資源の獲得

が不安定であることから資源は備蓄され、管理される。

ビンフォードのモデルとは別に、S.L. クーンはプロビジョニングと呼ばれる資源開発計画と行動計画の双方を最適化させるための戦



写真6 石器製作の道具類

略と、それを目的とした道具のデザインに関するモデルを提示している。これによれば、複数の資源が分散して分布する場合、資源の季節的増減の把握が困難になることから、集団は居住地を資源のある方向へ移動させて資源獲得の機会を増大させる。その結果、集団の移動性が増大することから、道具は軽量化されて運搬コストを減らすと共に、頻繁なメンテナンス等によって管理化させる。いっぽう、資源の分布が限定される場合、資源の獲得が予想しやすいことから、集団は拠点の居住地を設けて、拠点から資源を獲得するための小規模集団を派遣するようになる。その結果、特定地点での居住期間が長くなることから、資源が居住地に搬入・備蓄されると共に、専門性の高い多様な道具を製作するようになると考えられる。

ビンフォードのモデルで想定される資源環

境とそれに対応する集団の居住形態のうち、石器の管理化が発生するのはコレクターで想定されるような資源の分布が不均等な状況に適応した場合であるとするのに対し、クーンのモデルではフォーレジャーのような拠点的居住地を頻繁に移動させる居住形態であると見解が異なる。

奈良県を含む中四国及び近畿地方では、生業活動を行う中心地域であったと想定される古瀬戸内地域内に、二上山のような石材原産地が点在する（写真5）。そのため、生業域と石材原産地の分布が不一致な傾向にある関東平野域と比較すると、各種資源の分布は均一であるといえる。そのいっぽう、石材等の特定資源は採取可能な地域が限定されていたと考えられる。

法華寺南遺跡と同時期の遺跡として対比可能な遺跡は現在、近畿地方内で認めることは困難である。しかし、①法華寺南遺跡での石材の搬入形態は小形の剥片であり運搬コストが抑えられていること、②法華寺南遺跡では一定数のまとまりを持って石器が出土しているものの、同時期における関東平野等の他地域の遺跡と比較すると大規模遺跡の範疇には入りがたいこと、③奈良盆地北部が生業域の中心と想定される古瀬戸内地域と近傍の石材原産地である二上山との地理的位置関係からみて、中間地点に位置することを考慮すると、本遺跡はビンフォードのコレクター・モデルにおける少数集団が拠点から派遣された際に形成したものと想定され得ると考えた⁽³⁾。

4. 石器製作時の技法と姿勢

旧石器時代に出土する石器の殆どは原料となる原石を叩き割ることで製作される打製石器である（写真6）。ハンマーとなる敲打器には円礫や角、骨、木等が使用されていたと考えられる。叩き方としてはハンマーを振り下ろして素材を叩く直接打撃法のほか、ノミを使うように用いる間接打撃法、押し当てて剥



写真7 旧石器時代の湿原景観イメージ（長野県八島ヶ原湿原）

がす押圧剥離法といった種類がある。法華寺南遺跡では敲き石等の石器が出土していないが、剥片の形態等から、石製ハンマーを用いた直接打撃法であったと想定した。

また、現代において石器製作実験を行う際は、椅子に着席して作業することが可能である。しかし、旧石器時代に椅子は存在しないと考えられるうえ、腰かけることが可能な石や倒木が必ずしも存在するわけではない。石器製作時の姿勢を考古資料から読み取ることが事実上不可能であるが、どのようなものが妥当であるか検討した。

考え得る姿勢としてはあぐら座りのほか、^{そんきよ}蹲踞等が挙げられる。候補となる姿勢のなかから、素材の持ちやすさのほか、剥片剥離時の破損リスクや作業時の安全性の確保等の要件を満たし得るものを検討した。その結果、片膝立ちの状態^{もも}で素材を股の外側からはみ出るように持って固定したうえで、ハンマーを振り下ろす方法が、法華寺南遺跡における石器製作技術では効率的ではないかと想定した（写真4右上）。

5. 植生と動物相

後期旧石器時代の奈良盆地に広がる自然環境の詳細は、天理市布留遺跡での花粉分析等の古環境調査であきらかにされている。法華寺南遺跡が残された約3万年前、奈良盆地の低地には湿原が広がっており、湿原のなかには後世の大和川や佐保川となる河川が大きく蛇行しながら流下していたと考えられる（写真7）。

湿原にはカサスゲ等のカヤツリグサ科やヨシといったイネ科の植物が生い茂るいっぽう、河川沿いの自然堤防等の微高地ではハンノキ属やトリネコ属といった湿地に生える広葉樹の林が点在していた。また、現在の平城山丘陵の斜面や山地といった標高の高い地域では、カラマツ属やツガ属、ゴヨウマツ類等の針葉樹を中心に、コナラ亜属やカバノキ属、ハンノキ属といった広葉樹が混ざる森（針広混交林）が広がっていた。

後期旧石器時代に日本列島に生息していた動物も現代と一部共通するものの、大きく異なる。古本州島には絶滅してしまったナウマンゾウやヤベオオツノジカといった大型獣が

生息していたと考えられており、琵琶湖や大阪層群からも角や骨といった遺存体が発見されている。それ以外にも、ツキノワグマやニホンジカ、イノシシ、カモシカ、タヌキ、ノウサギといった中・小型獣も生息していた。これに対し、北海道にはマンモスやバイソンといった寒冷な気候に適応した動物が生息していたと考えられる。

法華寺南遺跡が残された3万年前頃には大型獣は未だ生息していたものの徐々に数を減らしていたと推測される。そのため、当時の人類はニホンジカやカモシカ、ノウサギといった中・小型獣を主な狩猟対象としていたと想定した。

6. おわりに

以上のような検討を経て、法華寺南遺跡の復元画を作成した(写真8・9)。本稿で紹介したとおり、復元画の制作では遺跡から直接読み取ることが可能な事項以外にも、諸種の事項について詳細を検討する必要がある。また、本稿で言及した事項以外にも服飾や集団構成、当時の平城山丘陵の地形等について数多くの議論がなされており、現代に生きる私たちの歴史に関するイメージが形成されることを実感した次第である。

註

(1) 復元画を作成するにあたり、田中さとこ氏に依頼をし、加藤真二副所長と芝康次郎主任研究員の指導のもと、小原が監修した。

(2) 展示では国内で一般的な呼称となる「ナイフ形石器」を採用している。

(3) クーンのモデルを重視した上で、石材資源採取可能域が限定されていることから、法華寺南遺跡は人類集団が拠点の居住地を設けた結果として想定することも可能である。そのため、今回の復元画が遺跡から推定される居住形態の在り方を一元的に決定づけるものではない。

参考文献

- 河村善也 1991 「ナウマンゾウと共存した哺乳類」『日本の長鼻類化石』亀井節夫編 pp164-170 築地書館
- 工藤雄一郎編 2022『復元イラストでみる！人類の進化と旧石器・縄文人の暮らし』雄山閣
- 小原俊行 2023『旧石器狩猟採集民の環境適応史』同成社
- 佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 奈良文化財研究所 2003『平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告書 旧石器時代編〔法華寺南遺跡〕』
- 日本先史・原史時代の人々の地形認識と土地利用研究グループ 1986「先史・原史時代奈良盆地の自然環境—その1 地形と地質について—」『奈良教育大学古文化財教育研究報告』15 pp1-30
- 松岡数充 1984「花粉分析よりみた奈良盆地及びその周辺における 35,000Y. B. P. 以降の森林植生変遷」『奈良盆地の古環境 布留遺跡をめぐる』pp25-47 埋蔵文化財天理教調査団
- Binford, L. R. 1980 Willow smoke and dog's tail: Hunter-gatherer settlement system and archaeological site formation, *American Antiquity*, 45-1: 4-20.
- Kigoshi, T., F. Kumon, R. Hayashi, M. Kuriyama, K. Yamada, K. Takemura 2014 Climate changes for the past 52ka clarified by total organic carbon concentrations and pollen composition in Lake Biwa, Japan, *Quaternary International*, 333: 2-12.
- Kuhn, S. L. 1992 On Planning and Curated Technologies in the Middle Paleolithic, *Journal of Anthropological Research*, 48-3: 185-214.



写真8 旧石器時代の法華寺南遺跡復元画（近景）



写真9 旧石器時代の法華寺南遺跡復元画（遠景）